



Data

監督・脚本・製作：アレクサンダー・ペイン

出演：ジョージ・クルーニー / シャイリーン・ウッドリー / アマラ・ミラー / ニック・クラウス / ボー・ブリッジズ / ロバート・フォスター / ジュディ・グリア / マシュー・リラード / メアリー・バードソン / グロブ・ヒューベル / パトリシア・ヘイスティ

👁️👁️ みどころ

アレクサンダー・ペイン監督は『サイドウェイ』（04年）でも本作でもアカデミー賞作品賞、監督賞、主演男優賞等にノミネートされたが、両者とも脚色賞だけに終わったのはなぜ？そんな反省(?)をしながら、しみじみとした人間ドラマの良さを堪能したい。

舞台はハワイのオアフ島とカウアイ島。妻の浮気相手を捜す奇妙な旅の中、父と2人の娘たちの絆は？また一族の長としての土地をめぐる決断は？注目すべきは近時のハリウッド映画には珍しく、おとなしくて地味なエンディング。このエンディングによってすべての変化を感じることができるから、映画ってすごい！

.....

アカデミー賞レースでは、脚色賞のみに！

第84回アカデミー賞の作品賞にノミネートされた10本の映画を、私は2011年2月26日(日本時間27日)の発表までにほとんど観ることができた。本作『ファミリー・ツリー』(11年)はそのラストとして3月28日に観たが、この時点では既にアカデミー賞の発表は終わっており、作品賞、監督賞、主演男優賞、脚色賞、編集賞にノミネートされた本作は結局脚色賞のみの受賞に終わった。『アーティスト』(11年)が作品賞、監督賞、主演男優賞等主要5部門を受賞し、『ヒューゴの不思議な発明』(11年)が美術賞、撮影賞、音響編集賞等の5部門を受賞して圧倒的な強さを発揮する結果になったわけだ。

本作はアレクサンダー・ペイン監督の7年ぶりの新作だが、前作『サイドウェイ』(04年)もアカデミー賞作品賞など主要5部門にノミネートされながら、脚色賞のみの受賞に

終わった(『シネマルーム7』212頁参照)、『キネマ旬報』の第84回アカデミー賞予想では、渡辺祥子氏、細越麟太郎氏、襟川口氏の3氏のうち2人が本作を作品賞と監督賞に予想し、3人ともジョージ・クルーニーを主演男優賞に予想していたが、残念ながらこれはすべてはずれ、「映画評論家」の事前予想がいかにあてにならないものかを実証した。しかして私は、既に結果を知ったうえでの話だが、本作はたしかによくできた作品だし、ジョージ・クルーニーもいまい味を見せてはいるが、『サイドウェイ』と同じように丁寧に描かれたヒューマン・ドラマで地味な映画。したがって、私の目には『アーティスト』や『ヒューゴの不思議な発明』、『戦火の馬』(11年)に比べると、ドラマチックな躍動感や意外性に乏しいから、やはり賞レースには不利。したがって、仮に事前に10本すべてを鑑賞したうえで予想しても、やはり私が推す作品賞の本命は本作ではなく、『ヒューゴの不思議な発明』『アーティスト』『戦火の馬』の順。

舞台はオアフ島、主人公は？

アレクサンダー・ペイン監督がジャック・ニコルソンを主役に起用して大ヒットした『アバウト・シュミット』(02年)は、定年退職したシュミットさんについての地味な1人の人間ドラマだった(『シネマルーム2』159頁参照)。それに対して『サイドウェイ』は中年の男2人、女2人がワイナリーめぐりをくり広げる中で展開される人間ドラマだったが、本作は再びハワイのオアフ島を舞台に、1人の裕福な地元の弁護士マット・キング(ジョージ・クルーニー)の人間ドラマを描くもの。

ハワイ(王国)は、カメハメハ大王が1795年に誕生させたもの。そんな歴史は大王の名前の覚えやすさもあって浸透している(?)が、マットはこのカメハメハ大王の最後の直系らしい。したがって、オアフ島に住んでいる彼はカウアイ島に先祖から受け継いだ広大な原野を所有していたが、永久拘束を禁止する法律に従って、今売却を考えているらしい。売れば大金が入ってくるが、親族縁者が多いからその意見統一は大変だ。

あまりの事態に主人公は？

そんな中、愛する妻のエリザベス(パトリシア・ヘイステイ)がパワーボートのレース中に事故に遭って植物人間状態に。生命維持装置を作動させ続けなければ生き永らえることは可能だが、それはエリザベスの意思ではないはず。そんな悩みの中、マットはそれまで仕事一筋に明け暮れていた人生を反省し、妻が目覚ましたら、今度こそ良き夫、理想の父親になると誓ったが、残念ながらそりゃ後の祭り。一緒に暮らしている10歳になる次女のスコッティ(アマラ・ミラー)はショックから精神不安定となり始めたが、マットはどう対処したらいいの?また、ハワイ島の全寮制の高校に入っている長女のアレックス(シャイリーン・ウッドリー)に母親のことを伝えなければならないが、クリスマスの日に母親とケンカして以来、口も聞いていないアレックスにどのように伝えれば?

マットは有能な弁護士らしいが、そんなこんなに対応に弁護士としての能力は何の役にも立たないから、今マットは戸惑うばかりだ。プールで泳いでいるアレックスにマットが母親の様子を説明すると、アレックスは激しく動揺したうえ、アレックスの口からは「パパは知ってる？ママは浮気してたんだよ」との驚くべき言葉が。これには、さすがのマットもビックリ。近所に住む親友夫婦に問い詰めると、エリザベスの浮気は彼らも知っていたが、マットには黙っていたらしい。厳しい追及の結果、そこで明らかにされた浮気相手の名は、ブライアン・スピーア（マシュー・リラード）。それって、一体ダレ？

カウアイ島への旅の目的は最悪！チームワークも最悪？

『サイドウェイ』はワイナリーをめぐる楽しいロードムービーだったが、本作では売却予定の土地を確認する目的はともかく、カウアイ島への今回の旅の真の目的は妻の浮気相手スピーアを捜すものだから、その目的は最悪！エリザベスの父親は大金持ちにもかかわらずマットは何事にも儉約家



『ファミリー・ツリー』5月18日(金)、TOHOシネマズ日劇ほか全国ロードショー
(c)2011 Twentieth Century Fox

だったので、自分の娘は元気な時に全然贅沢ができなかったとマットを責めたが、今更そんなことを言われても・・・。

奇妙なのは、そんな最悪の目的のツアーに当事者(?)のマット、長女のアレックス、次女のスコッティの他、アレックスのボーイフレンドのシド(ニック・クラウス)が同行していることだ。無神経な発言が目立つこの若者をマットは全然気に入らなかったが、アレックスから「この人と一緒に自分の機嫌がよくなるの」と言われると反撃できないようだから、父親の権威はアレックスには全く通じないらしい。ちなみに、アレックスを演ずる1991年生まれシャイリーン・ウッドリーはテレビ出演は多いものの映画は初出演らしいが、スタイル抜群の美形だから本作で大ブレイクの予感が。当初はクソ生意気で何かと父親に反抗的なアレックスだったが、このケツタイな旅を経験する中でラストには父親と心を通い合わせるまでに変化していく姿に注目！

おっと先走ってしまったが、妻の浮気相手捜しのこの旅はとにかくスピーアを見つけ出し、言いたい放題文句を言ってやろうという目的のみでつながっているから、そのチームワークも最悪？すると、目的が達成されたらこのツアーはたちまち解散？そんな波乱を含

みながら、いくつかの偶然を経て一行は1歩また1歩、スピアーの元へ。

自制心の効いた大人の会話とチームワークに感服！

カウアイ島に入ったマット様御一行はまず一族の広大な所有地を確認したが、その途中で偶然わかったのは、スピアーはカウアイ島の不動産業者らしいこと。そうだとすると、もともとマットはこの男と接点があったのかも？しかし、妻はなぜそんな男と浮気を？さらに偶然は重なるもの。カウアイ島で1番有名なハナレイの浜辺をマットがジョギングしている時にすれ違った男が何とスピアーだったから、ビックリ。その後をつけてみると、スピアーは今妻子と共にここのコテージでパカンスを楽しんでいるらしい。外からその様子を盗み見たマットが、そこで考えたスピアーをとっちめる戦略とは？

『難波金融伝・ミナミの帝王』のギンちゃんこと萬田銀次郎は「逃げれば地獄まで取り立てに行く」のが諷刺文句だから何でもアリだが、ドラマを見てると意外に『三国志』の諸葛孔明も顔負けの戦略家・策略家であることがわかる。それと同じように(?) マットは、海辺に立って子供たちにあまり遠くまで泳ぎに行かないよう注意しているやさしい母親つまりスピアーの妻ジュリー・スピアー(ジュディ・グリア)に向かって、まずは当たり前障りのない挨拶で自己紹介を……。その後マットはアレックスと2人でスピアーのコテージに乗り込んで行ったが、本作中盤のハイライトはここでのやりとりだ。ここでマットとアレックスはあくまでジュリーに違和感を持たせないようにスピアーに近づき、マットとアレックスのあうんの呼吸によってアレックスがジュリーを引きつけている間にマットがスピアーと2人きりになるチャンスをつくり、そこでマットはスピアーに対して言いたい放題、聞きたい放題……。ここまでの戦略、計略を練ることができ、かつ実践できるのはマットが弁護士として長年い仕事をしてきたためだろうが、そこでの『難波金融伝・ミナミの帝王』のギンちゃんを彷彿させる、自制心の効いた大人の会話とチームワークの良さに注目！

この決断はお見事！それができた理由は……？

マットがカウアイ島を訪れたもう1つの理由は、先祖伝来の土地を売却するについて、一族の会議を開いてその了解を得ること。この一族がどういうルールで結束しているのかはよくわからないが、一族のリーダーがマットであり、マットの腹一つで方向性が決まることはまちがいないようだ。しかし、いくらそんな権限を持っていても、既成方針として固まっているものを覆したりしたら一族の間に亀裂が生じるのでは……？そんな心配の中、マットが土地売却について下した結論とは……？

マットが妻の浮気相手であるスピアー捜しの旅に出かけ、直接スピアーをとっちめる(?)までの時間はそれほど長いものではなかったが、その間に形成された父と娘2人の結束はかなりのものだったから、家族が共に過ごした時間の密度はすごく濃いもの。また、

スピーアーに対して言いたいことを言ったからといって何がどう解決するわけでもないが、これによってマットの気持が整理できたことはまちがいないさそうだ。マットが土地売却問題についてある決断を下すことができたのも、そんな気持の整理ができたためだ。すると、もう一つ。カウアイ島への妻の浮気相手捜しの旅の中で、妻に対してそして娘たちとの関係についてマットが下した決断とは・・・？ラストに向けて、それに注目！

ハワイでは安楽死は？なぜジュリーがここに？

日本では安楽死には法的に厳格な要件があるためその実行は難しいが、ハワイでは？本作にそこらあたりの説明がないのが少し不満だが、それはあくまで弁護士としての興味であって、作品の出来そのものには関係なし。再びオアフ島の家に戻ってきたマットと娘たちは、いよいよエリザベスとの別れの日を迎えようとしていた。そこで起きたハプニングは、思いがけずスピーアーの妻ジュリーがエリザベスの「お見舞い」にやってきたこと。アレックスたちが気を利かして病室を退出し、部屋の中にマットとジュリーの2人だけになると・・・。

勘のいいジュリーは、あのコテージにマットとアレックスが訪れてきた後の夫スピーアーの変化に気づき、事態を把握したらしい。そんな状況下なぜ、ジュリーはエリザベスのお見舞いにやってきたの？そこらあたりの人間ドラマの描き方がアレクサンダー・ペイン監督はうまいから、このシーンは是非しっかり味わってみたい。

このエンディングに注目！

しかして、本作最後の注目点は、何でもないような居間の風景で終わるエンディング。巨額の費用をかけたハリウッド大作のクライマックスは血湧き肉踊るものが多いが、本作のエンディングは居間のソファに座ったマットと2人の娘が1枚の布（ハワイアンキルト）を足元にかけてながらテレビを観るシーン。もっと細かく言うと、父親のマットがソファに座ってテレビを観ていた次女のスコッティにおやつを渡しなが隣に座ると、続いて長女のアレックスもそこに合流してきたため、マットがおやつを渡すと共に毛布をさらにアレックスの足元にかけてやるというシーンだ。特にどの番組を観るために集まったわけではないようだが、エリザベスの事故が発生し、エリザベスの浮気が判明する中で、あれほどギクシャクしていた父親と2人の娘の関係が、今はなぜこんなに穏やかに？それが一目で読み取れるこのエンディングは、そのセッティングに全然カネはかけていないけれども立派なもの。

本作がアカデミー賞作品賞、監督賞、主演男優賞、脚色賞等にノミネートされたのは地味ながらこのラストのシークエンスのおかげ。そう言っても過言ではないこのエンディングに注目！

2012（平成24）年3月31日記